

104. 守山市伊勢遺跡の 五角形住居2例

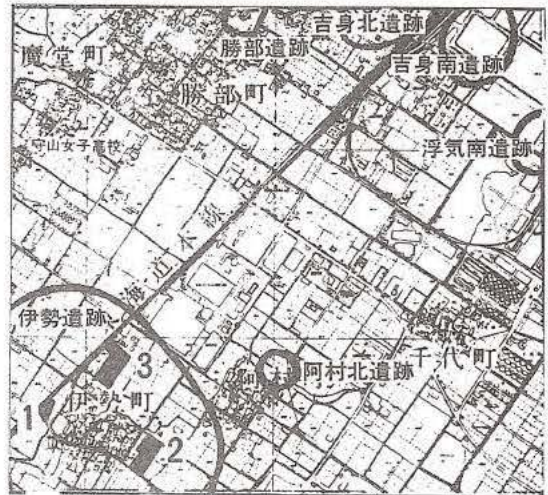
ここに紹介する竪穴式住居は、1981・82年の2次におわたって調査を実施した守山市伊勢町地先で検出された2例の五角形平面をもつ住居である。県内で検出された貴重な資料となるのでその概要を報告することにする。

1. 位置と環境

本遺跡は守山市域の南東端に所在する伊勢町の北半を占め、調査地は地形図に示す3か所である。今回報告する住居跡が検出されたのは1・2の地点で、現況は水田である。国鉄守山駅から約1kmで、周辺にはまだまだ水田の残る田園地帯である。周辺の環境は駅一帯に古墳時代後期の竪穴式住居を主体とする集落跡の吉身南・北遺跡、その東には古墳時代前期の竪穴式住居からなる浮気南遺跡、勝部町には勝部城跡、阿村町には古墳時代後期の散布地である阿村北遺跡が所在している。

2. 遺跡の内容

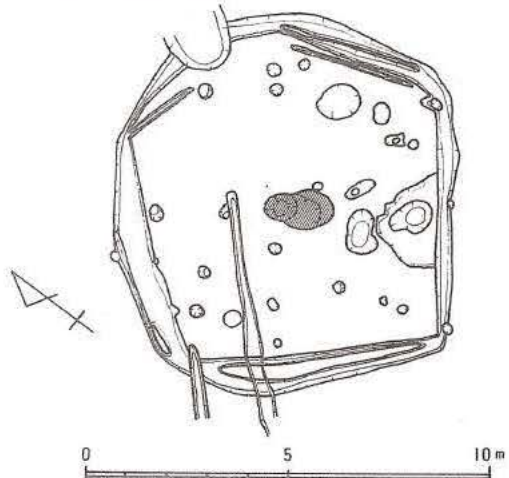
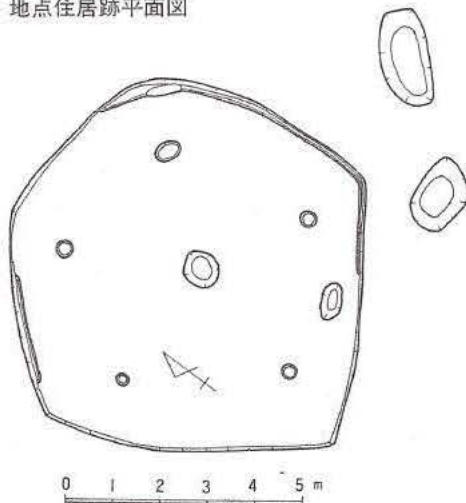
1981・82年の調査では、第2地点で弥生時代後期の竪穴式住居(五角形を含む)が7棟と平安時代後期掘立柱建物2棟、井戸跡1基、第3地点では11棟の方形竪穴式住居(弥生時代後期)、方形周溝墓6基(古墳時代



遺跡位置図

前期)、平安時代土壘などが検出されており、大規模な複合遺跡であることを示している。第3地点の住居は一辺約6.2m、第2地点では大型で7mを超えるものもあり、第3地点の住居の中には壁溝の幅がひろいものがあるが、同じ形態は示さない。また両地点とも多角形状に掘られた住居跡状の掘り込みがみられたが、柱穴や遺物がなく、問題を後に残すことになった。また、方形周溝墓に伴う集落の所在については明らかにできず、やはり、集団のあり方には疑問点を残すこと

第2地点住居跡平面図





第1地点住居跡



第2地点住居跡

になった。

3. 住居跡の特長

まず、良好な第1地点の住居について示しておこう。調査面積が約500㎡と小規模ながら、竪穴式住居1、井戸2(内1基は平安時代)、溝(古墳時代後期)、土壌が検出された。紹介する住居はほぼ中央で検出されている。住居は平面の規模約49.91㎡でおよそ一辺5.06m(平均値)の角の丸い五角形状をなす。床面には各コーナーに対応して柱穴が五か所穿たれ、中央および東壁面近くに土壌がある。もともと壁溝が各辺を周回していたと思われるが、残存していたのは北寄り、および西辺沿いであった。本住居内からは床面より若干浮いた状態で遺物が多量に出土した。

第2地点の住居は調査地の南端で検出され、平面規模が66.58㎡程で南半は角があるが北半は円弧状をなしている。ただ、床面で壁溝が五角形状に巡り、南東部、東辺・北東辺では二重に掘り込まれていて特長である。床面中央には炉跡、東南辺沿いに土壌がみられる。支柱穴は第1地点のように明瞭でなく、八角形になる可能性がある。遺物は極めて少ない。

4. 第1地点の土器

合計37点の器形判別可能な土器と砥石の中から住居の時期を把握できる器形を網羅して計14点の遺物を紹介しよう。

A. 長頸壺(1~3)

10点の長頸壺の中にも器形上の特長から三種に細分することが可能である。1のように頸の長さが中位であるもの、2のように相当長いもの、3は短いものというように頸の長さで分類することができる。この頸の長さの差異とともに体部も少々変化をもつようである。1は体部内外面に細かい刷毛目調整を施したあと頸部・体部とも全面に篋研磨するもので、頸部は漏斗状にひらく。2は頸部長と体部高が1:1に近い長頸

で内外面に刷毛目調整を施す。3は頸部と体部の比が1:3に近い形状で表面の残存度が悪いため不明瞭だが刷毛目調整で仕上げている。

B. 壺(4~6)

壺にも二種以上があるが、ここでは広口壺(4・5)と6の受口状口縁をもつ壺をあげた。4・5は類似した形状(体部)で口縁端部の仕上げと頸部の文様の有無に相違がみられる。4は刷毛目調整、5は指による掻き上げと篋研磨によっている。他の広口壺には搬入品(中河内地方)もある。受口状口縁の壺は2点みられ、同種口縁の甕と同じ文様や調整方法をもち、頸部が長く絞られているだけの差である。他に長頸の広口壺が1点みられる。

C. 鉢(7・8)

鉢の基本形は一つで、大型と小型との二種が認められる。内面は指ナデ調整・外面は粗い刷毛目調整のうえに文様をつけている。8は体部下半に貼りつけ突帯をもち、その上に施文している。いずれも受口状口縁である。

D. 高杯(9~11)

計8点のうち3点を図示する。8点の細分は杯部の段の有無にあり、有るものは大型で無いものは小型である。10は有段でいいいな篋研磨で仕上げるが、部分的に刷毛目を残す。脚筒部に三角形の記号文様を付す。9も10と類似した形態で杯口縁部が外反してひらく点で差異がみられる。11は無段で小型である。内外面を篋研磨し、脚筒部に沈線文を施す。

E. 器台(12)

1点だけの出土で、鼓型に近い形状で、外面にいいいな篋研磨が残る。

F. 甕(13・14)

受口状口縁甕5点くの字口縁が2点の計7点である。大型の14は下胴部に8と同じ貼りつけ突帯をつける

ともに連弧文がみられるが、13は波状文のみで差異がある。口縁は14が顎のつくり方が強く屈曲度も大きい。中に、下胴部の貼りつけ突帯のないものがある。

5. 第1地点住居の時期

14点の図で出した遺物から時期の限定をしてみよう。近江の最近の成果と中河内地方の研究をあわせて検討する。まず、V様式の中の「鬼塚」～「上小阪」に位置づけがなされた野洲町久野部遺跡七ヶ坪地区^①、同じく「上小阪」期並行と考えられた守山市横江遺跡^②、「西ノ辻I式～馬場川」と考えられている大津市檀木原遺跡^③等を参考にしてみると、長頸壺では横江・久野部より古相を示し、檀木原と比較すると類似する内容をもっている。北大津遺跡では西ノ辻ED式とする13などで類例があり、やはりV様式前半に位置づけが可能である。器形別に検討できる紙面がないので土器群としてとらえるなら、西ノ辻I式より後出的で上小阪期以前の中に求めることが可能と思われる。

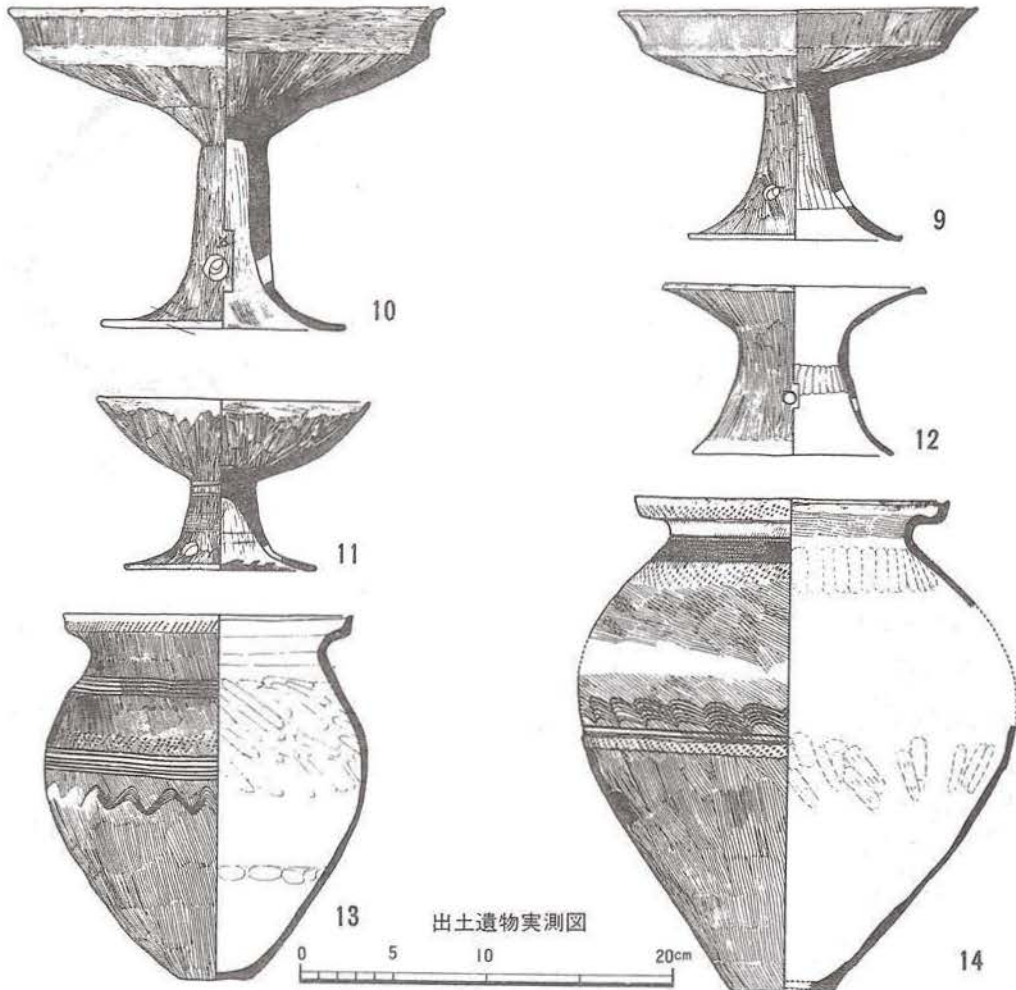
6. まとめ

伊勢遺跡は弥生後期、古墳時代中期、平安末期の三期の遺構を残す複合遺跡であり、本文で紹介した住居は弥生後期の住居である。近江での多角形住居の検出例の少ない中で、2例の五角形住居の存在は、野洲川流域に自然発生的な感を受けず、高地性集落の出現によって説かれる倭国大乱をいう歴史事象など、クニの成立にみられる階級国家への胎動のあらわれとしてとらえられはしないだろうか。

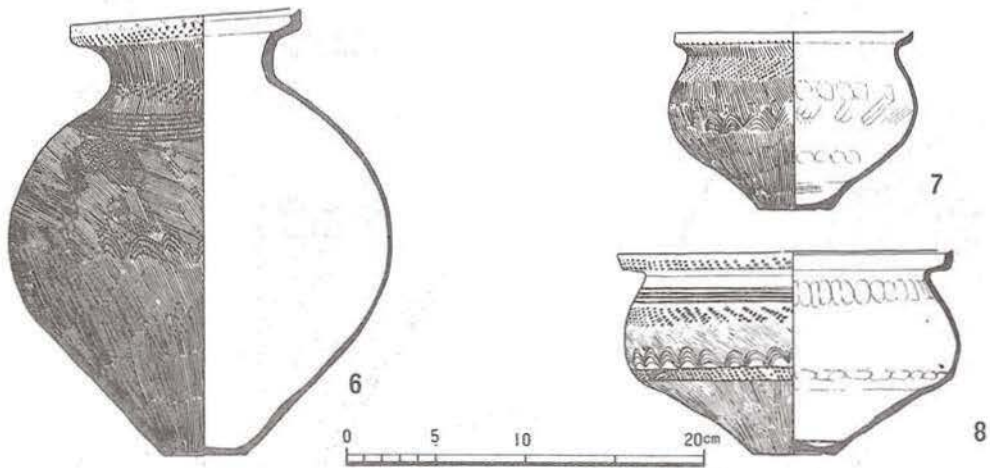
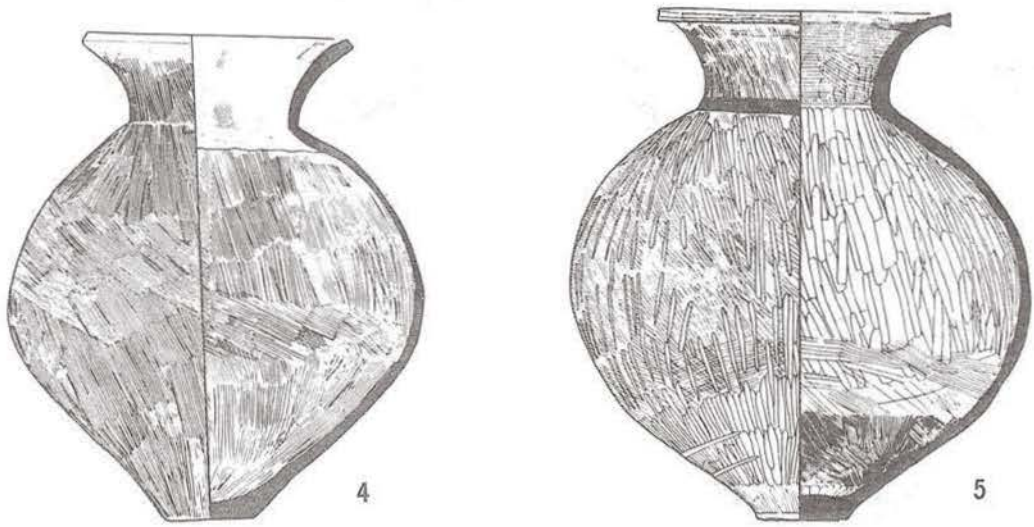
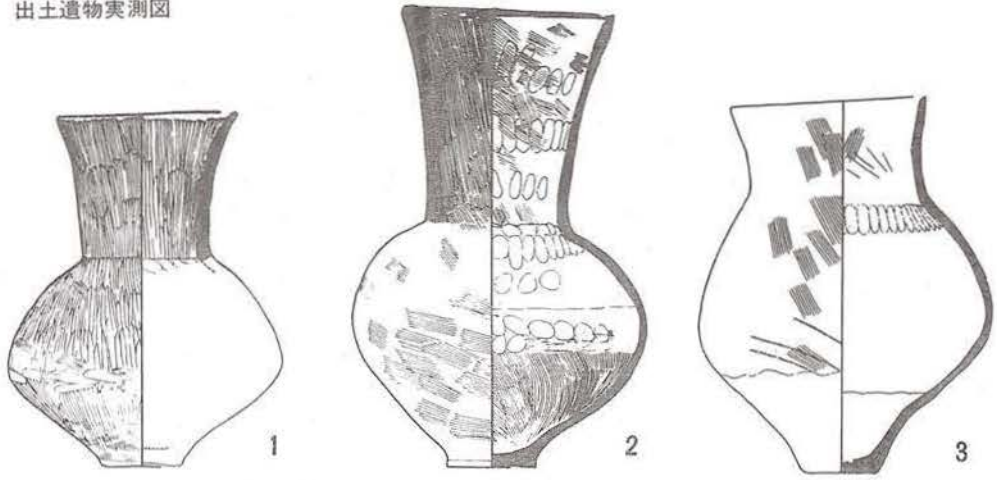
(岩崎 茂 山田謙吾 山崎秀二)

参考文献

- ①昭和52年「久野部遺跡発掘調査報告書一七ノ坪地区一」別所健二
- ②昭和54年「湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書一横江遺跡・大門遺跡一」大橋信弥
- ③昭和57年「檀木原遺跡発掘調査報告書Ⅲ」葛野泰樹
- ④昭和54年「北大津の変貌」中西常雄



出土遺物実測図



0 5 10 20cm